A Grammar of Tense and Verb Morphemes with the Standard Japanese and the Saga Dialects as Its Initial Scope

古賀 弘毅
佐賀大学

《要旨》本稿は、日本語標準語と佐賀西部（芦刈）方言を初期射程とした時制および動詞形態の文法を提案する。Hayata （1998）は佐賀武雄方言の声門閉鎖音を予測する反証可能な音韻分析であるが、射程外の佐賀芦刈方言の以下の事実を説明しようとすれば、不十分であろう。佐賀芦刈方言では声門閉鎖音は、１）子音終末動詞基動詞のうち「一漢語/s/」動詞（例、「略する」、「愛する」）、２）/e/母音終末動詞基動詞、３）不規則動詞/k/ ‘come’ と/s/ ‘do’ の「現在形」の末尾に現れ、かつ、これらにしか現れない。さらに、例えば、不規則動詞/s/には、古典語で/s-eba/ ‘do-if’、現代語で/sur-eba/ ‘do-if’ と、/sur/ ‘古典語定形+r’ も動詞基であるかのように見える。本稿は、これらの現象を、１）今まで「現在」と仮定されてきたが、実はそれ自体は意味を持たない暫定時制形態/u/と、２）有元（2007）の/r/語幹化に類似する「定形か動詞基かを補語として取る動詞基終末形態/r/」とを、音韻論、音韻統語境界分析、統語論、意味論、語用論の分業を行う文法によって、上記の現象を説明する。(配布物は英語で、発表は日本語で)。